

感情と知覚のかかわりに関する実験的研究

内山 伊 知 郎

感情と知覚の関係については、体系的理論がなく、それらのかかわり方については大きな関心事であるにもかかわらず、まとまった知見が見られない。最近にいたって、Izard (1977) が知覚の選択性を感情の一機能と考え、感情が知覚を方向づけると論じたり、Lewis & Rosenblum (1978) が、“認知→感情”，あるいは“感情→認知”の一方向性を考えるだけでなく、“感情⇄認知”とフィードバックする過程としてとらえなければならぬと主張している。

また、Schachtel (1959) は、知覚の二つの様相として刺激中心の知覚 (allocentric perception) と感情中心の知覚 (autocentric perception) をあげている。すなわち、前者の知覚では、刺激の物理的特性についての情報受容が優位にたつであろうし、後者では、それらから生じる感情が優位にたち、物理的側面に関する情報の受容に何らかの影響を与えたと考えられている。

しかし、これらの見解にも実証的検討はほとんどなされておらず、その必要性が痛感される。そこで、ここでは感情と知覚の関係について、実験的検討を試みることにした。その場合、まず有機体の感情状態を正確にとらえなければならないが、内観、生理学的指標、表出行動の観察などの手法を用いることが考えられる。従来、そのうちの一つを用いた研究がよく行われているが、Izard (1977) や Lewis & Rosenblum (1978) が論じるように感情は意識レベル、生理学的レベルなどを総括的に含むものであると思われる。そこで、とりあえず主観的報告と生理学的指標により感情をとらえていくことにした。まず、前者については従来“快—不快”の軸にだけそってとらえがちであったのを、Mehrabian & Russell (1974) の考え方に基づいて、Pleasure, Arousal, 及び Dominance の三次元によって記述を試みた。また、日常場面で生起する感情は、より基本的な個別感情が複数混在している場合が多いと思われるので (Izard 1977), それらのパターンとしてとらえることも試みた。さらに、後者については瞳孔反射, GSR を用いて、生理学的側面からの検討を行った。

一方、有機体が刺激から受容する知覚的情報について再認テストによりとらえた。本研究では画像刺激を用いたが、それからえられる情報については、Mandler &

Jonson (1976) や Mandler & Parker (1976) の分類に従って、品目情報 (inventory information) や空間的構成情報 (spatial composition information) など4種類を考えた。再認テストを作成する際には、これらを考慮にいれてディストラクタを作成した。なお、知覚 (perceiving) と記憶 (memorizing) の関係については、Appel, Cooper, McCarrell, Sims-Knight, Yussen, & Flavell (1972) の考えに基づいて、単に刺激を見ることだけを教示した場合を知覚と、また刺激提示後に施行する再認テストのために刺激を記憶するように教示した場合を記憶として区別した。以上によって、感情と知覚の関係を検討した。また、被験者に大学生と小学6年生を用いて発達的見地からの検討も試みた。本研究は4つの実験からなり、そのうち2つは予備実験であった。

予備実験 I

本研究で用いる刺激図版の検討を行った。また、同時に感情記述の手法について具体的検討を試みた。被験者は大学生20名であり、比較的感情的に変化を生じさせやすい図版 (以下A図版と呼ぶ) と比較的变化を生じさせない図版 (以下N図版と呼ぶ) から生起する感情を、ここで作成した感情評定質問紙と生理学的指標 (瞳孔反射とGSR) により測定した。その結果、A図版はN図版にくらべ、より感情的に受けとめられやすかった。その際、“楽しさ”と“驚き”の感情に比較的大きな差が認められた。また、質問紙も比較的適切に感情を記述するものであったように思われる。さらに、瞳孔反射が“楽しさ”と、GSRが“驚き”と対応しやすいという結果がえられた。

予備実験 II

刺激提示後に施行する再認テストの予告なしで刺激図版を提示する知覚条件と、再認テストの実施を予告して提示する記憶条件において生じる知覚的情報の受容のあり方の相違について検討した。また、刺激提示時間の効果と、再認テストにおけるディストラクタの適切さを検討した。被験者は大学生40名であり、予告の有無×提示時間 (5, 7 sec) の4群にわけられた。そして、N図版

を提示した後、再認テストを施行した。なお、再認テストは正図版に対する確信度により回答するものである。その結果、予告、提示時間ともに主効果が認められ、予告のある場合、または、提示時間が長い場合に正図版に対する確信度が高かった。また、再認テストの結果から、取り扱う情報の種類を統一することにした。そこで再認テストを作成しなおした。

実験 I

有機体が刺激図版により生起する感情と、それから受容する知覚的情報との関係について検討した。また、その際の予告の効果を検討した。被験者は大学生48名であり、予告の有無×感情(N, A図版)の4群にわけられた。刺激図版提示後、再認テストを施行した。また、図版の内容、及び特に注目した部分について報告を求めた。その結果、予告条件と感情条件に主効果が認められ、予告あり、または感情的に受けとめない場合に確信度が高かった。その際、両図版ともまんべんなく見られており、視線の特殊な動きの影響は受けていないと思われる。

実験 II

ここでは発達の視点からの検討を試みた。まず、小学生に生起した感情をとらえ、そして小学生に対して実験 I と同様の試みを行った。被験者は小学6年生60名であり、そのうち20名を刺激図版から生起した感情の検討に、また40名を感情と刺激図版から受容する知覚的情報との関係の検討のために割り当てた。方法は、予備実験 I、及び実験 I と同じであるが、感情を測定するための生理学的手法は用いなかった。その結果、感情の量的側面では、小学生も大学生とほぼ同じであった。しかし、質的側面では、大学生と異なり“楽しさ”だけで両図版に相違が認められ、“驚き”では認められなかった。また、正図版に対する確信度については、予告条件で主効果が認められなかった。しかし、感情条件には主効果が認められ、刺激図版が感情的に受けとめられた場合に確信度が高かった。この小学生と大学生における結果の相違は、刺激図版により生起した感情の相違によるのであろう。なお、感情評定質問紙は、小学生を被験者とした場合でも比較的適切であったように思われる。

以上の結果から、ここで扱った感情と知覚的情報の種類に限定したならば、“楽しい”感情が生起した場合に知覚的情報の受容が促進され、“驚き”が生起した場合には抑制されるようである。次いで、ここでえられた知

見に基づいて今後の課題を明らかにした。

(1) 感情の記述について

ここでは、現象記述的な接近法と構成概念的な接近法を併用して感情の記述を試みた。両者の関係についてはここで用いた刺激図版の数も、サンプルの大きさも十分ではなかったため、今後検討していかなければならない。また、生理学的手法に関しては、特定の生理学的指標と個別感情の間に関係が見い出された。しかし、ここで生起したのは複数の個別感情を含む複雑な感情であり、今後特定の個別感情だけが生起した事態における検討を進めると同時に、特定の生理学的指標と個別感情の対応関係だけでなく、感情を複数の生理学的指標の反応パターンとしてとらえていくことも必要であろう。その際、感情を記述するための有効な手がかりの一つである表情の検討も行うことが望ましいであろう。

(2) 刺激図版について

大学生と小学生では刺激図版により生起した感情が異なったが、これは刺激図版に登場する人物の年齢、あるいはそこで起きた出来事などによる内容に対する没頭(involvement)の程度のためなのであろうか。さらに、ここで生起しなかった多種類の質的に異なる感情が生起する事態を設定するために、新しく異なった内容の図版を作成するだけでなく、ここで用いた3枚の図版からなるアニメに、4枚目以降の図版を加え、ストーリーを変化させることも一案であろう。いずれにせよ、各年齢層の被験者が日常親しみのある行動、出来事を十分考慮したうえで、これらの工夫を行うことが重要であろう。

(3) 感情と知覚的情報の受容について

刺激図版によって感情が生起した場合、図版からえられる知覚的情報の程度に影響の及ぶことが明らかになった。さらに、今後ここで扱わなかった種類の感情や知覚的情報についても検討を進めていく必要がある。

なお、この研究では、被験者として大学生と小学6年生を用いたが、両群の刺激図版の受けとめ方について相違が明らかになったものの、両群に同じ感情が生じた場合の知覚的情報の受容のあり方については論じられない。ここでは、小学生といっても6年生であり、比較的年齢が高いが、さらに小学校の低学年、あるいは幼児まで年齢をさげたとすれば、大学生と同じ感情が生じた場合でも果して知覚的情報の受容のあり方が大学生と同じであるかどうかは疑問であろう。

研究をこの段階まで進めていくには、以上に述べた数多くの未解決な問題の検討を十分に行っていかなければならない。